

組織行動研究

No. 5

編集後記にかえて

●週刊誌をつくる人たちはなかなかの“社会心理学者”だわいと思う。つい最近まで「窓ぎわ族」なる人種のことをさかんに取りあげていたかと思ったら、今度は「巣ごもり族」なる新人種を紹介しだした。車内広告のいかにもありそうでなさそうなチラシにつられて、わたしなぞは駅に降りるヤキオスクの売店に一目散、早速その週刊誌を買い求めるということにあいなるのだ。読み終って「チエッ、180円損した」と思うことが半分、「ああ、なかなかいいトコ突いてる」と思うことが半分。ところで、「巣ごもり族」とは、わが慶大医学部の小此木助教が言うところの「モラトリアム人間」のこ

となのだが、この、小此木助教の『モラトリアム人間の時代』(中公叢書)を、かつてわたしのゼミナールで読んだことがある。そのとき学生たちは口をそろえて言った。「いやあ、このヒト、俺たちのことよくワカッテル。俺たちはほんとに“モラトリアム人間”なんだよナァ。」「巣ごもり族」の面目躍如といった読後感ではなからうか……。多少の皮肉を込めて「読む」ことを義務づけたわたしなぞはいい加減“シラケ人間”に陥ってしまったのだった。

●大学教育における「ゼミナール」という場合は、考え出すと実に妙チクリンなしろものである。タテマエからいえば、卒業論文に向けて専門的な研鑽と指導とを交流させ合う場ということなのだろうが、正直言って、このわたしなぞは何をしているのかわからなくなってしまいがたびたびだ。ある時は「お前ネェ、読んでこないからそういう訳のわからないレポートになっちゃうんだよ」とヤクザまがいの言辞をはきつつ長の講釈に及んだり、ある時には「子供は国の宝、みんな仲良くしよう」とばかり手を組んでは野山を一緒に歩いたり、そしてそんなことをやっているうちに「ああも

うラチがあかない、早く大学を卒業していただくのが一番の教育」と投げやりな気分にとりつかれたりしてきて、“しかしてその実体は”と我ながら首をかしげてしまう。

●こういう、大学教師としての“アイデンティ・クライシス”を感じていたためでもあったらうか、本号に第一報を報告した「現代に生きる児童・生徒の価値意識」調査プロジェクトでは、大変興味深い見聞をさせていただいた。と同時に、始末の悪いことがいっぱいあるとはいっても、小中学校教育の現場にくらべれば、大学教育および大学教師の“極楽トンボ”ぶり——真正面から見ずえれば恐ろしいほどの“地獄絵図”にはちがいないのだが——も次第にわかってきた。わかってきつつあるところでさてどうするか? 「巣ごもり族」に仲間入りするには気恥かしい齢ごろとはあいなってしまったし、かといって「地獄の閻魔大王」で生きるほどのエネルギーもないようだし……。こんな与太を愚図っているうちに、大学に居て大学を捨てるという先人賢者たちの道を歩み出すことになるのであろうか。アナ、オソロシヤ、オソロシヤ!  
(南隆男)

慶應義塾大学産業研究所社会心理学研究班モノグラフ

組織行動研究(第5号)

編集 佐野勝男・南 隆男

KEIO STUDIES ON  
ORGANIZATIONAL BEHAVIOR AND  
HUMAN PERFORMANCE No. 5  
MARCH 1979

〒108 東京都港区三田2-15-45  
発行 慶應義塾大学産業研究所  
電話 (453) -- 5640(直通)  
〈昭和54年3月31日〉

〒104 東京都中央区八丁堀3-21-4  
印刷 株式会社 国際印刷  
電話 (551) -- 3930(代表)  
〈昭和54年3月24日〉